

- 1 頭垂る稲の動脈かき切らむ
- 2 鳥鳥鳥びっしり寄り添ふ十二月
- 3 仔鼠をそっと握らば腸（わた）温し
- 4 節分会吾が心根の鬼痛し
- 5 腕時計月が齧りて時歪む
- 6 良質の毛皮となりしいのちかな
- 7 黄ばみたる前歯によつきり冬ねづみ
- 8 瞳孔を開ひて閉ぢて兎ら遊ぶ
- 9 脳表を虹が過（かす）らば多幸福感
- 10 時空をば歪めて遊ぶ金魚かな
- 11 縦長の猫の屍骸や兎ら無邪気
- 12 月曜日もろびと扁（ひら）たくなりけり
- 13 曲がり角猫の尻尾が残りけり
- 14 喧嘩せり白菊紅菊女の死
- 15 曇天に圧されて歩く冬日かな
- 16 冬の蝶女の口より出で来たる
- 17 凍天に緋色の太陽炸裂す
- 18 竈の焰祖母の眼恐く照らしたり
- 19 翔ぶことの叶はぬ空を冬の虹
- 20 桃色の肉球愛し春日和
- 21 鳥の首三ツ並びて冬来たる
- 22 過ぎ去りし清濁凡て星の煌（きら）
- 23 冬短日慌てて紅引く牝月（をんなづき）
- 24 狂ひ雲前歯剥き出し山脈（やま）喰らふ
- 25 日溜りで二本の脚が彷徨へり
- 26 だらだらと血が滴れり曼珠沙華
- 27 凍てつく夜野鼠凍る五分前
- 28 獣鳥苔蟲茸風倒木
- 29 しあはせをひとふさぐだされこのざるに
- 30 木の動脈どくどくどくどく人間喰はば
- 31 たまゆらの波のいのちや雑魚の骨
- 32 半死ニの毛蟲は吾に非ざるも
- 33 轍路泣く骨や肉やのせつなさに
- 34 蜜柑喰ふ妻の口もと蟲の如
- 35 いつまでも黙ってゐるなあをぞらよ
- 36 牝牛が怒れる乳を放射せり
- 37 父子ふたり鹿殺したる絆かな
- 38 雨の音グラスの中に残りけり
- 39 雨の音心音に似て微睡みぬ
- 40 太陽を裸婦で覆ひて原爆忌
- 41 冬の蝶轍路を延々舐めにけり
- 42 朝焼けを裸婦と観てゐる床温し
- 43 雨の夜半宿るを知らぬ仔猫啼く
- 44 草餅を四ツの口が頬張れり
- 45 あをぞらを見つめし猫や脚三本
- 46 枯れてなを紅の残像曼珠沙華
- 47 一片の麴麴に宿りし仏かな
- 48 現世はコスモスの花揺れる間に間に
- 49 行き止まり右も左も日曜日
- 50 鳩時計ときおり恐く嗤ひたり

特別賞

園田源二郎 (060)

- 75 74 73 72 71 70 69 68 67 66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51
- 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100
- ドーナツの真ん中に在る小宇宙
世の中に女の増えて月紅紅(あかあか)
祖母煮込むカレーライスと土着信仰
秘密基地猫を殺しし児らの翳
暗室に叔父の残像時歪む
まやかしのあをぞら消へて墓に雪
もふ何も言ふことは無し女晴れ
死に損なひ残花腐りし冬椿
野仏が撒き散らしたる微笑かな
死に体の野良猫(のら)一匹分冬すすむ
でろでろと舌の貌の雲ばかり
鉄仮面落つれば冬の銀河なり
女の眼緋色の空を粉碎す
眠る月つひに野犬の視野に入り
変貌す蛾はひときれの更紗かな
母の脳少し死にたり冬短日
柩車過ぐコスモスの影揺れてゐる
さよならにさよならをして北極星
蛾の飛翔サイケデリックに闇を裂く
死にゆく人間にさへもヒエラルキイ
水槽に鯰一体座敷牢
俄か雨ピンク映画の看板に
カーテンの影の間に蛾の舞踏
冬天に煙草の焰(ひ)すら死ニ火山
厳冬夜襟元ぬくし猫一枚
- 月死にてぽっかり空ひた丸ひとつ
鯉のぼり兄、姉となり早十年
ありのまま晒け出せづくに曼珠沙華
木犀の残り香消さむ家近し
古時計サディステイックに時刻む
軋軋(きしきし)と冬の桜は耐へる骨
母嗤ふ百八番目の煩惱ゆえ
沈黙す野薔薇赦さじ霜の刑
蜜柑の香部屋中満ち満ち八ツの掌
没日すでに群青の犬が啣へけり
メロドラマわたしに遠し煎餅かぢる
冬の蝶日溜り嬉し小躍りす
君がふと洩らしし独白蝉時雨
蝶蝶の翔びまねしたる児の未来
太陽が隠蔽す暗黒の生態系
北枕夜半に林檎の匂ひ満つ
天の歯牙すこしちぢみて冬ざるる
冬の首ごろりと落ちて揚羽発つ
寂しさは小鳥に結わへて春へ遣る
冬短日髭の白髪を抜ひてゐる
秘密裏にきみを抱くなり曼珠沙華
古時計ねづみの睡りは永し短し
睡る伽藍木佛(きぶつ)の歓喜や暴発す
わたしの忌黒蟲こぞりて念仏念仏
冬の蝶女体に潜みて春日待つ

